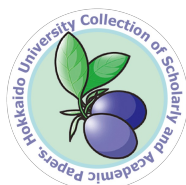




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語日本文化研修コース上級クラスにおけるカリキュラム：”上級日本語”科目を中心に
Author(s)	小林, 由子
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 1, 128-144
Issue Date	1997-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45554
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC001_009.pdf



日本語日本文化研修コース 上級クラスにおけるカリキュラム — “上級日本語” 科目を中心に —

小林 由子¹⁾

要 旨

北海道大学の日本語日本文化研修コースは国内でも独自のプログラムである。しかし、そのコースのありかたについては従来あまり議論されてこなかった。本稿の目的は、1995年度から行っている上級クラス（Fクラス）のカリキュラムについて、「上級日本語（読解・文法）」科目を中心に記述し、今後の改善に向けて分析を行うことである。

日本語日本文化研修コースの目的は日本語・日本文化を専攻する学部生の日本語能力を向上させ日本文化・社会への理解を深めることである。必修科目は主にその前者を受け持つが、上級クラスでは、より効果的な学習をはかるため内容重視のカリキュラムを組んでいる。特に前期の「上級日本語」科目では、ボトムアップ的な言語処理とトップダウン的な言語処理の相互作用を促すことを意図している。

2年間の実践においてこのカリキュラムは一定の成果をあげたと言えるが、ニーズ分析、話題・教材の選択、学習活動の設計にはまだ課題が残されている。

〔キーワード〕 日本語日本文化研修コース、カリキュラム、読解・文法クラス、コンテンツベース、相互作用アプローチ

1. はじめに

「日本語日本文化研修生」は、日本国外の大学で日本語・日本文化を専門とする学部生が1年間日本の大学で日本語・日本文化について研鑽を積むために来日する国費留学生である。受け入れは全国で行われているが、国立大学で日本語日本文化研修生のための特別なプログラムを持っているのは、京都大学、大阪外国語大学、名古屋大学、北海道大学のみである。このうち、京都大学は日本語能力試験1級レベルの学生を受け入れている。

大阪外国語大学は修了単位数のほとんどが選択科目であり、必修科目を中心にプログラムを組んでいる北海道大学とは異なっている。また、名古屋大学と北海道大学は日本語が中級レベル以上の学習者を対象としており、それぞれ独自のプログラムを組んでいる。名古屋大学の実践については藤原・榎山（1997）に詳しいが、独自に開発した教科書をベースに行う名古屋大学と北海道大学における実践はおのずから異なる。

北海道大学における日本語教育の柱の1つであるにもかかわらず、日本語日本文化研修コースの内容については、これまであまり議論されてこなかった。日本語日本文化研修コースの目標は日本語・日本文化の習得であり、大学・大学院での研究生活を支えるための予備教育・学内補講・学部レベルの日本語教育とは異なる。コースの内容を改善していくためには、目標を視野に入れた科目内容や学習活動の検討が行われなければならない。

本稿では、日本語日本文化研修コース上級クラス（Fクラス）で2年間（2期）実施した前期「上級日本語（読解・文法）」科目を中心に、カリキュラムの記述・分析を行う。「上級日本語」科目では文法・語彙など言語的な側面と日本文化などの内容的な側面の両面からの学習が必要であり、日本語日本文化研修コースの特徴を反映していると言える。後期のクラスについては、原稿執筆現在2年目を実施中であるため、機会を改めて述べたい。

2. 北海道大学における「日本語日本文化研修コース」上級クラス

2.1 「日本語日本文化研修コース」の概要

「日本語日本文化研修コース」は、日本国外の大学（主として3年次以上）に在学し、日本語・日本文化に関する専攻を履修している者、他の専攻分野を履修しつつ日本語・日本文化に関する分野も学習している者を対象とし、各人のレベルに応じて日本語・日本文化の研究に必要な日本語全般に関するブラッシュアップを行い、かつ、自己の専門分野とする日本事情・日本文化についてより深く理解させるための科目の教授、将来の研究に対する指導・助言を行うことを目的としている²⁾。

コースは10月から翌年9月までの1年間で、前期（10月～翌年3月）15週間、後期（4月～9月）15週間の2期に分かれている。クラスは、入学時のプレイスメントテストで分けられる中級クラス（Eクラス）と上級クラス（Fクラス）の2クラス編成である。

授業時間数・開講科目は留学生センターの「日本語日本文化研修コース内規」により定められているが、必修科目の時間数は、中級クラスが前期270時間、後期120時間の計390時間、上級クラスが前期150時間、後期120時間の計270時間である。日本語日本文化研修生はその他の選択科目も含め1年間で540時間以上の科目を履修しなければならない。

コースの最後に、各学生はそれぞれの興味のあるテーマについてレポートをまとめ、レポート集を発行することと、スピーチをすることが義務づけられている。

2.2 1995年9月以前の上級クラスの必修科目

上級クラスの必修科目は前期・後期とも「上級日本語講読（講読）」「上級日本語演習（演習）」「視聴覚演習Ⅱ（視聴覚）」「文章表現Ⅱ（文章）」の4科目（各週2コマ 1コマ＝50分）であるが、担当者が変わると共に位置づけも変わっている。その概略を表1に示す³⁾。

	講 読	演 習	視 聴 覚	文 章
1994年3月以前 (前・後期)	新聞を速く正確に 読みとる	自己の関心のある テーマについて調 べ発表する	発音、ニュース・ ビデオ教材の聞き 取り	取材、構成など総 合的な文章表現力 を養う
1994年4月 ↓ 1994年9月	新聞、小説、小論 文、講演集を読む	「日本語相談」を 読む	ドラマの作成	様々な文章を書く ために必要な表現 や構成法を学ぶ
1994年10月 ↓ 1995年3月	新聞の表現、口語 と文語の表現の違 い	既習文型の復習 新しい文型の習得	画像・音声教材を 使って、正しく日 本語を聞き、発話 する	実用文、レポート などいろいろな文 章の書き方
1995年4月 ↓ 1995年9月	『閉ざされた言語 日本語の世界』を 担当者を決めて読 む	研究レポートの個 人指導、発表	映像教材による文 化理解、読みとり、 発表、映像の作成	研究レポート作成 を目的とした活動

表1 1995年9月以前の上級クラスの必修科目

3. 学習者のニーズ

表2・表3は1995年10月と1996年10月に来日した日本語日本文化研修コース上級クラスの学生の国籍・専門・北海道大学で勉強したいこと・卒業後の希望・修了レポートテーマの一覧である。専門・勉強したいこと・卒

業後の希望は入学時の質問紙調査による。

	国 籍	専 門	勉強したいこと	卒業後の希望	修了レポートテーマ
1	アメリカ	日本語 日本文学	漢字 日本文学	政治・外交・ 古代美術を勉強 したい	カラオケ文化論
2	オースト リア	日本語 会計学	漢字 文法 敬語	観光の仕事か 日本語教師	北海道方言
3	香港	日本研究	文法 日本文化	通訳	日本のテレビコマーシ ャル
4	ドイツ	日本史	論文の書き方 語彙 スピーチ 要約の仕方	日本史の研究者 ジャーナリスト	高田屋嘉兵衛について
5	スウェー デン	記述なし	文法 発音 歴史 比較文化 北海道の文化	外交的な仕事が したい	漢字の過去・現在・未来
6	タイ	日本語	文法 漢字 ニュースの読み方 日本文化	日本留学 日本語を使った 仕事がしたい	若者言葉

表 2 1995年10月入学生の概要

	国 籍	専 門	勉強したいこと	卒業後の希望	修了レポートテーマ
1	ドイツ	日本文学	漢字 読むこと 日本文化	日本語を使った 国際関係の仕事	明治時代と現代の女性の 立場の比較
2	タイ	日本語	日本語 日本文化	国際的なオーガ ニゼーションを するような仕事	日本の天皇とタイの国王 の比較
3	ポーランド	日本語の口語	漢字語彙 文法 慣用句	未定だが日本語 教師の可能性有	インターネットのチャッ ティングで使われている 日本語
4	チェコ	日本語 日本文化	記述なし	記述なし	日本の近代建築

表 3 1996年10月入学生の概要

表 2・3に見られるように、学習者の専門は主に日本語・日本文化であるが、分野の限定のされかたの細かさは異なり、日本語・日本文化以外の専門を持つ者もある。卒業後の進路は、仕事に日本語を使う者と研究者を志向する者に分かれる。また、修了レポートのテーマは、後期の初めに学習者が担当教師と相談した上で関心に応じて決めたものであるが、多岐に

わたる。

学習者が入学時に北海道大学で勉強したいと考えていたことも多岐にわたっている。1995年・1996年の学習者計10名が勉強したいこととして挙げたことがらを再分類すると、以下のようになる。数字は人数である。

1) 大きな学習カテゴリーに関する項目 (のべ7)

日本文化 4、日本語 1、日本文学 1、比較文化 1
歴史 1

2) 言語項目 (のべ13)

文法 5、漢字 3、語彙 1、漢字語彙 1、敬語 1、
慣用句 1、発音 1

3) 言語技能に関する項目 (のべ5)

論文の書き方 1、スピーチ 1、要約の仕方 1
ニュースの読み方 1、読むこと 1

これらは、学習者自身が自覚しているニーズと考えることができるが、具体的なものと未分化なものが混じっている。比較的挙げた人数が多かった項目は、文法、日本文化、漢字である。

また、学習者の能力であるが、「上級クラスは日本語能力試験1級に合格している者、あるいは同程度の力を持つ者」⁴⁾とされているにもかかわらず、1級を持つ者はいない。日本語能力試験合格者は3級が2名、2級が1名である。高校の交換留学生として1年間留学していた者が2名、大学のプログラムで3か月間来日していた者が1名あったが、学習者の日本語能力は平均すると日本語能力試験2級前後のように思われる。

学習者は全員日本語を専門とする学部生であるが、出身大学での使用教材にはばらつきがあった。また、1996年入学者4名のうち3名が読解を専ら翻訳により学んだと回答している。

上級クラスのカリキュラム内容は、入学前に送られてきた学習者の書類の記録にもとづいて立てられ、入学後の質問紙調査・観察・インタビューによって修正された。

4. 1995年10月以降のカリキュラム

4.1 カリキュラムの概要

1995年10月に筆者が担任になったのを機に、上級クラスの必修科目の内容を変更した。表4はその概略である。

	講 読	演 習	視 聴 覚	文章表現	日本語研究 3
1995年10月 ↓ 1996年 3 月	・必修科目のテーマに即したさまざまなジャンルのものを読み、読解力・語彙力・文法能力・口頭表現能力を養う ・必要に応じて、文法の演習を行う		必修科目のテーマに即したビデオ教材・テレビ番組・映画の視聴を通じて聴解力・口頭表現力を養う	必修科目のテーマに即した内容で、論文作成に必要な文章表現力を養う。	日本人へのインタビュー・発表を通じて口頭表現法・調査方法を学び、日本への理解を深める
1996年 4 月 ↓ 1996年 9 月	『日本語相談』および関連資料を読み、読解力・語彙力・口頭表現能力を養う	レポート作成の支援（調査法の基礎、発表、個人作業およびコンサルティング）	いろいろなジャンルのテレビ番組の視聴・討論を通じて聴解力・口頭表現能力を養う	論文作成に必要な文章表現力を養う。内容は各人のレポートテーマに準ずる。	必修科目ではない
1996年10月 ↓ 1997年 3 月	・文法能力の養成（テキスト使用） ・必修科目のテーマに即したさまざまなジャンルのものを読み、読解力・語彙力・口頭表現能力を養う		必修科目のテーマに即したビデオ教材・テレビ番組・映画の視聴を通じて聴解力・口頭表現力を養う	必修科目のテーマに即した内容で、論文作成に必要な文章表現力を養う	日本人へのインタビュー・発表を通じて口頭表現法・調査方法を学び、日本への理解を深める
1997年 4 月 ↓ 1997年 9 月	テーマにそって、様々なジャンルのものを読み、読解力および日本への理解を深める	・レポート作成の支援（主に発表とフィードバック、その他は教室外作業） ・文法演習	いろいろなジャンルのテレビ番組の視聴・討論を通じて聴解力・口頭表現能力を養う	論文作成に必要な文章表現力を養う。内容は各人のレポートテーマに準ずる。	必修科目ではない

表 4 1995年10月以降の必修科目

1995年 9 月以前からの変更点は、以下のとおりである。

- 1) 前期を「日本語をブラッシュアップし、自分のテーマを見つける」期間、後期を「レポート・スピーチの準備と日本語力の強化をはかる」期間と位置づけた。
- 2) 前期の授業をテーマベースとし、必修科目共通の話題を設定した。
- 3) 前期の「上級日本語講読」「上級日本語演習」をまとめて「上級日本語」とし、時間数を週 6 コマとした。
- 4) 必修科目の時間数が足りないため、本来選択科目であった「日本語研究 3」を上級クラスの必修科目に準ずる科目として設定した。理由は、後期のレポート作成とスピーチのための基本的な調査研究技能と

口頭表現能力を、クラス全体として養成する必要があると判断したためである。

4.2 コンテントベースのカリキュラム

日本語日本文化研修コースは、日本語・日本文化を専門とする学習者が日本においてその日本語力を高め、自分の関心のあることがらを中心に日本文化・社会への理解を深める、特殊目的を持った一種の専門コースと見ることができる。その教育内容は、日本語と日本に関する専門知識の両方にわたる。

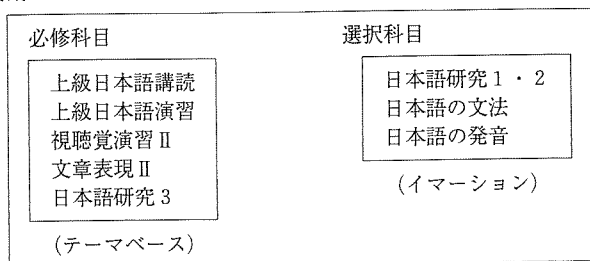
横田 (1991) は、専門教育とのつながりを重視した日本語教育の方法として、言語と内容が結びついたカリキュラム (Content-based curriculum) が効果的であるという言語教育観を紹介している。その根拠としては、1) 言語は意味のある社会的・学問的文脈の中で最も効果的に学習される、2) 内容と言語を統合して教育することによって、言語学習に必要な動機と認知基盤を与える、3) 分野によって異なる語彙、言い回し、文法構造などを習得することができることが挙げられている (横田 1991: 123-124)。加えて、Brinton らは、新しい言語項目と内容の知識が、意味のある文脈の中で補い合うことにより、言語の形式・機能・意味がより効果的に習得されることを挙げている (Brinton et al. 1989: 3)。また、認知心理学の分野では、学習項目が記銘の際に意味と結びついた処理をされ意味的な構造に組み込まれるほど忘れにくくなることがよく知られている。

日本語のブラッシュアップを目的とした前期のカリキュラムにおいて共通テーマを設けたのは、科目間で同じ話題を扱うことにより語彙的な負担を減らし、内容中心のカリキュラムを組むことによって日本語学習を効果的に行うためである。

内容重視のカリキュラムは、学習する内容と対象が第二言語使用者のみかどうかで何種類かに分けられるが、上級クラスの場合は必修科目が「テーマベース (第二言語使用者のみ対象、言語と内容を統合的に学習)」、選択科目が「イマーション (第二言語使用者のみ対象、専門的な内容を学習言語で学ぶ)」であるといえる。

上級クラスのカリキュラムの全体像を図1に示す。

前期



日本語力養成・レポートテーマの発見



後期

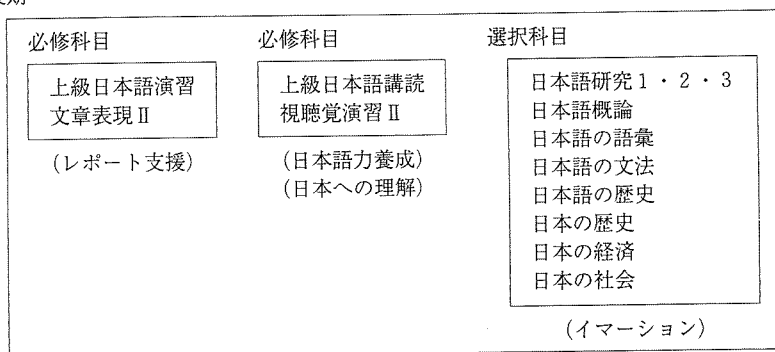


図1 上級クラスのカリキュラム

5 前期「上級日本語」のカリキュラム

5.1 「上級日本語」の位置づけ

前述したように、「上級日本語」は「上級日本語講読」と「上級日本語演習」をまとめたものである。その役割は、日本社会・文化への理解を深めるとともに、主に文字の面から受容的な言語能力を高めること、語彙を増やすこと、文法的な運用能力を高めることである。問題は、いかにして内容を重視しながら文法・漢字・語彙の運用能力を高め、読みの技能を育てるかということである。特に、レポート作成のため日本語の資料を読みこなすための読解技能を育てること、レポートのための予備的なインプットをしていくことが重要となる。

5.2 相互作用アプローチ

古典的な読解指導では「読みとは厳密な過程で、文字や単語の一字一句をもらさず認識・識別する訓練が重要である」という考え方があった（津田塾大学言語文化読解研究グループ 1992：3）。その後の心理言語学の研究成果や心理学におけるスキーマ理論によりトップダウン的な読解過程が重視されるようになったが、第二言語での読解研究においてトップダウン処理に焦点が置かれすぎたため、最近の動向として「相互作用」ということばの再認識が促されている（吉岡 1994：270）。

ここで言う「相互作用」とは読み手とテキストの相互作用ではなく、トップダウン処理とボトムアップ処理の相互作用のことである。Eskey（1988）はボトムアップ処理すなわち言語構成要素の処理がより速く自動的にできるようになることによってトップダウン処理もより容易になると主張している。筆者の観察でも事前に言語構成要素の演習を行った方が読解が容易になるように思われる。

「上級日本語」の読解授業は、「言語構成要素の演習→背景知識のスキーマを活性化させるための予備質問→内容読解」という手順で行った。

5.3 話題（テーマ）

前期の必修科目共通の話題（テーマ）は、授業担当者の合議⁵⁾によって決定された。選択の基準となったのは、「日本語日本文化研修生が日本社会・文化の理解を深めるために適当か」「適切な教材があるか」ということである。テーマはほぼ2週間に1つの割合で設定した。1995年前期・1996年前期のテーマは以下の通りである。

1995年前期：住宅、家庭、教育、宗教、政治、経済・社会

1996年前期：若者、政治、会社、北海道、家族、教育、宗教

1995年が「住宅」で1996年が「若者」で始まっているのは、「学習者がまず目にするものは何か」という観点で決めたためである。1995年の「経済・社会」は枠組みが大きすぎたため、1996年にはより具体的に「会社」とした。1996年の「政治」は選挙に合わせて入れたものである。

5.4 教材

「上級日本語」では、文法演習と読解を行っているが、1995年と1996年では教材が異なる。

1995年

	テーマ	タイトル	出典
1	住宅	「日本の住宅・生活環境」	『世界の中の日本の暮らし』 大蔵省印刷局
2		「ライフスタイルの変化と住宅」	『日本事情ハンドブック』 大修館書店
3		「縁通じた共生へ」	『ゆたかさの中で』朝日文庫
4	家族	「結婚相手に希望する条件」	『図説家族問題の現在』 NHKブックス
5		「夫婦の平等感と決定権」	『図説家族問題の現在』 NHKブックス
6		「お見合いの仕方」	ビデオ「冠婚葬祭入門」 スクリプト
7		「高齢者のライフスタイル」	『図説家族問題の現在』 NHKブックス
8		「老後の生き方」	『現代日本人の意識構造』 NHKブックス
9	教育	「受けさせたい教育程度」	『現代日本人の意識構造』 NHKブックス
10		「しみこみ型のしつけと教育」	『日本人のしつけと教育』 東京大学出版会
11	宗教	「信仰・信心」	『現代日本人の意識構造』 NHKブックス
12		「宗教的行動」	『現代日本人の意識構造』 NHKブックス
13		「新宗教は気楽で呑気なのがいい」	雑誌『頓智』
14	政治	「戦後政治と長期保守政権」	『日本事情ハンドブック』 大修館書店
15		(コラム) 卓上四季	北海道新聞
16		「雪対策再考の時期に」	北海道新聞
17	経済・社会	「天下り大蔵省の責任は重い」	雑誌『AERA』
18		「ニッポンの常識は世界の非常識だ?!」	雑誌『自由時間』
19		(エッセイ)「経済記事を読みつつも、人差し指はお色気グラビアページに挟むおじさん」	群ようこ『半径500メートルの日常』 文春文庫
20		ダイエー社長インタビュー	雑誌『自由時間』

表5 1995年「上級日本語」読解教材

1996年

	テーマ	タイトル	出典
1	若者	「20代後半の男性はものの豊かさも大事」	『統計よもやま話の本』・大蔵省印刷局
2		「生活充実の手段」	『現代日本人の意識構造』NHKブックス
3		「若者ことば」	雑誌『ダカーポ』
4	政治	「無党派層の思いは報われるのか」	雑誌『ニューズウィーク日本語版』
5	会社	「大企業信仰が崩れつつある」	雑誌『自由時間』
6		「理想の仕事の条件」	『現代日本人の意識構造』NHKブックス
7	北海道	「北海道の道民性」	『やっぱり北海道だべさ』勁文社
8	家族	「男女のありかた」	『現代日本人の意識構造』NHKブックス
9		「変わる結婚観」	『男と女 変わる力学』岩波新書
10		「離婚の原因」	『男と女 変わる力学』岩波新書
11	教育	「しみこみ型のしつけと教育」	『日本人のしつけと教育』東京大学出版会
12		「自殺予告電話にどう応じるか」	雑誌『AERA』
13	宗教	「日本人の信仰・信心」	『現代日本人の意識構造』NHKブックス
14		「創称宗教と自然宗教」	『日本人はなぜ無宗教なのか』ちくま新書
15		「無宗教という名の宗教心」	『日本人はなぜ無宗教なのか』ちくま新書

表6 1996年「上級日本語」読解教材

文法演習は、1995年は読解教材に含まれる文型・表現に加えて、『文法セルフマスターシリーズ』（くろしお出版）などから抜粋した教材を使って行った。一方、1996年は、『助詞・助動詞』（国書刊行会）を中心に、読解教材に現れる文型・表現を追加する形で行った。

「上級日本語」で使用した読解教材を表5・表6に示す。

使用した教材はすべて日本人向けに書かれたものである。これは、出身

大学では入手しづらい日本に関する情報を提供することを意図したためである。市販教材は、学習歴がさまざまで既に使用している可能性があるため使用しなかった。

1995年より1996年の教材数が少ないのは、1996年の方が文法演習にかけ時間が多かったことによる。ちなみに文法演習と読解の時間の比率は、1995年がおおむね1対2、1996年がおおむね1対1であった。

1996年の変更点は、テーマが変更されたことに加えて、1995年に多用した解説記事を減らし新書や雑誌の抜粋のような意見をまじえた文章を増やしたことである。教材は、テーマに合わせて担当者が選んだものから学習者の希望も交えて選択した。各テーマ毎に解説記事と意見の入った素材を組み合わせるようにしてある。

5.5 学習活動

学習活動として次のようなことを行った。

文法演習：

- 1) 確認のための予備練習
- 2) 例文の提示・用法解説
- 3) 空欄補充練習、単文完成練習
- 4) クイズ

読解：

- 1) テキストコピーと予習シートによる予習。予習シートには、漢字語彙の読み、その他注意する語彙（提示のみ）、予習問題（ないこともある）が含まれる。
- 2) 読む前の予備知識の確認・インプット
- 3) 語彙、表現の用法練習
オノマトペ、副詞、慣用句の演習も含む
- 4) 文構造を把握する練習
指示詞、拡大分節の認知
- 5) 内容読解（教材により異なる）
 - ・表を完成する
 - ・時系列に沿ってイベントを記述する
 - ・内容と問題文が合っているか○×でチェックする
 - ・要約文を完成する

・内容質問に文で答える

6) ディスカッション

7) 教師による関連する話題の紹介

8) クイズ (主に漢字の読み、表現・語彙の使い方)

読解の1) 3) 5) 8) はボトムアップ的な活動、2) 5) はトップダウン的な活動である。

6. 学生からの評価

学期の中間と期末に学生による質問紙を使用したコース評価を行った。評定はテーマと教材については「面白かったか」「役に立つと思うか」、学習活動については「役に立つか」について5点尺度で行い、その他に自由記述欄を設けた。学習者数は1995年・1996年の総計で10名と少ないが、そのおおまかな傾向について述べる。

1) テーマ

2以下の低い評点がついたテーマはほとんどなかったが、何が「面白いか」「役に立つか」については、学習者によりばらつきがあった。これは学習者の関心、背景がばらついているためと思われる。比較的评价が高かったのは、「面白さ」については「若者」「家族」、「有用性」については「若者」「政治」であった。

2) 教材

教材についても評点が2以下のものはほとんどなく、ばらつきが多かった。ばらつきが比較的少なく評価が高かったのは、「夫婦の平等感と決定権」「男女のありかた」「自殺予告電話にどう対応するか」である。「教科書的ではない日本についての生きた情報」を評価する声もあった。

長さについては、1回の授業で読む量が3000字を越えるものについて「長すぎる」という意見があった。また、口語体を多用した「新宗教は気楽で呑気なのがいい」、話題について歴史など多くの予備知識が必要だった「北海道の道民性」について「むずかしい」という意見があった。

前期は文芸的な素材よりも解説的な素材を主にしたが、文芸的なものが読みたいという意見が特に文学志望の学習者から出された。

3) 学習活動について

共通して評価が高かったのは、語彙・文型・表現の使い方についての学習活動である。特に意味が似たものの使い分けについての項目が役に立つ

という評価が多かった。学習者のニーズとして多かったのが「文法」「漢字」であったことを考えるとこれは当然の結果かもしれない。一方、内容読解に関する活動は、「書く」活動が少なく口頭での問答形式が多かったため、「文法」「漢字」「語彙」に比べるとそれほど評価は高くなかった。また、教師による関連した話題が役に立つという声もあった。

7. 今後の課題

「上級日本語」の話題・教材・学習活動に対する評価は、5点尺度でおおむね4前後であり、それほど悪くはなかったといえる。しかし、コースの改善のために考えていかなければならない課題は多い。

繰り返し述べているように日本語日本文化研修コースの目的は「日本語・日本文化」の日本における研鑽である。しかし、その目的を達成するために何が必要かについては、教師の経験則と学習者の希望による部分が多く、まだ議論の余地がある。

学習者自身が自覚しているニーズは、学習者に必要なものを必ずしも反映しているとは限らない。Hutchinson and Waters (1987) は学習者のニーズを necessities、lacks、wants に分けて述べている。特に wants には学習者の情意的なものが反映する可能性がある。たとえば、学習者に「勉強したい」ものを尋ねた場合「ドラマ」「テレビ」という回答が返ってくることもあるが、この回答は「必要性」よりも「楽しみ」がを優先している可能性がある。

3で述べたように、学習者の背景・将来の希望はさまざまであるが、授業はこの学習者の necessities、lacks を満たすものでなければならない。そのためには以下のようなことがらを検討していく必要がある。

- 1) 「日本語・日本文化」の学習に必要な「内容」
- 2) 学習者に欠けているものを事前評価するための方法
- 3) 文法・語彙項目のシラバス
- 4) 必要な「内容」と「日本語」のための教材開発
- 5) 適切な学習活動

「上級日本語」では、一斉授業を前提とした授業設計を行い「自分の大学では入手しづらい情報について」「さまざまな素材を日本語で読み読解力を養う」ことを目指したが、「書く技能」との統合が十分ではなかったくらいがある。自律学習のための読解ストラテジーの教育や個々の学習者

への対応もあまりなされていない。最終的に学習者は自力で日本語の資料を読みこなし研究していく力が必要になる。学習者はそれぞれ異なる学習歴や学習観、学習スタイルを持っており、各人別々の多読を課すなどの個別的な対応が望ましいかもしれない。

また、時間数や科目設定の問題もある。現在の開講科目は平成3年度に改定された内規によって定められているが、日本語を専攻する学生の裾野の広がりから当初の想定よりも学生のレベルは下がっており、上級クラスの必修の時間数は足りないのが現状である。年度により学習者の背景のばらつきは大きく、柔軟に対処できるような内規の改正が望まれる。

注：

- 1) 1995年10月期より日本語日本文化研修コース上級クラス担任
なお、1995年度・1996年度の授業担当者は以下の通りである
上級日本語講読・演習 小林由子
視聴覚演習Ⅱ・日本語研究3 石島満沙子（非常勤講師）
文章表現Ⅱ 山科紀子（非常勤講師）
- 2) 平成4年度～平成6年度『北海道大学留学生センター点検評価報告書』
pp.16
- 3) 1995年9月までの概要は、同上 pp.17-26、門脇（1995）、佐藤（1996）
による
- 4) 平成4年度～平成6年度『北海道大学留学生センター点検評価報告書』
pp.16
- 5) 授業担当者については注1を参照

参考文献：

- 門脇誠一（1995）「日本語日本文化研修コース活動報告」『北海道大学留学生センター年報』第4号 pp.37-50
- 佐藤豊（1996）「日本語日本文化研修コース活動報告」『北海道大学留学生センター年報』第5号 pp.42-52
- 津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ（編）（1992）『学習者中心の英語読解指導』大修館書店
- 二通信子（1994）「スタディ・スキルを重視した授業の実践と考察（1）」『北海学園大学論集』第80・81号

- 日本語教育学会（編）（1991）『日本語教育機関におけるコースデザイン』
 凡人社
- 藤原雅憲、榎山洋介（編）（1997）『上級日本語教育の方法』凡人社
- 横田淳子（1990）「専門教育とのつながりを重視する上級日本語教育の方法」
 『日本語教育』71号 pp.120-133
- 山本一枝（1992）「読解力の養成法」『日本語教授法（下）』（講座日本語と
 日本語教育第13巻）明治書院 pp.268-301
- 吉岡元子（1994）「リーディング」小池生夫（監修）『第二言語習得研究に
 基づく最新の英語教育』pp.266-286、大修館書店
- Brinton, D. M., M. A. Snow, and M. B. Wesche. (1989) *Content-Based Second
 Language Instruction*. Newbury House.
- Carrell, P. L. (1988) Interactive text processing: implications for
 ESL/second language reading classroom, in Carrel et al. (ed.)
Interactive Approaches to Second Language Reading, pp.239-259.
 Cambridge University press.
- Eskey, D. E. (1988) Holding in the bottom: an interactive approach to the
 language problems of second language readers in Carrel et al. (ed.)
Interactive Approaches to Second Language Reading, pp.73-100.
 Cambridge University Press.
- Hutchinson, T. and A. Waters. (1987) *English for Specific Purposes*.
 Cambridge University Press.

The curriculum of advanced level reading and grammar class in Japanese language and culture studies course

KOBAYASHI, Yoshiko

Japanese language and culture study course is one year course for undergraduate level Government Scholarship students who wish to deepen their language skills and understanding of Japanese culture. The course of Hokkaido University has unique character because it has exclusive course for intermediate-advanced level students. But there is little discussion about the curriculum of the course.

In this paper the following points are described and discussed, 1) what kinds of students attend the course 2) how is the advanced-level curriculum, 3) how is the curriculum of grammar and reading class. The students need to brushup / improve their language skill and learn about Japanese culture / society. Therefore content-based curriculum adopted to the class. Interactive approach is taken in grammar and reading class.

The grammar and reading class got a certain result. But there are some problems to be solved, 1) to assess the necessities and lacks of the students, 2) to get hold of the subjects to teach Japanese culture and society, 3) to develop materials and 4) to develop activities to grow up students reading skills and autonomy.